

『百物語評判』と西村本

寺 敬 子

はじめに

『百物語評判』は、北村季吟門下の俳人、山岡元隣宅で行われた「百物語」の会を筆録した怪談集であるが、この山岡元隣なる人物は俳人であると同時に医者、国学者、仮名草子作家としても活躍した人物であった。同書の内容は、百物語の会で語られる怪談に、元隣が陰陽五行等の論理をもって科学的な説明、つまりは「評判」を加えていくというもので、元隣と他の参会者との間のやりとりがそのまま収録されたという形になっている。本書はその序文、跋文によれば「百物語」の会に居合わせた参会者の一人、「やつがれ」によって筆録され、元隣の死後、その息子である山岡元恕が筆を加えて、貞享三（一六八六）年に刊行されることとなったという。つまりこの作品には元隣、元恕、百物語評判会の参会者、筆録者、といった複数の人間が関わっていることが想像でき、言うなれば元隣グループの共作であるといえる。しかしこの参会者や「やつがれ」と名乗る筆録者が一体誰であったのかは未だ不明のままであり、元隣の文学グループが一体どのようなメンバーで構成されていたのか、ということが大きな研究課題として残っている。

一方この『百物語評判』と並んで、論題としてあげた「西村本」であるが、こちらは天和から元禄年間にかけて、

「京都の書肆西村市郎右衛門未達が、作者として、もしくは板元として関与した一連の小説群」⁽¹⁾を指す。この西村本の浮世草子は中世風の物語から怪談・諸国咄、好色本と、多様な内容を含むもので、同時期に活躍した大坂の西鶴の作品に対抗しての出版活動が行われていた。なおこれら浮世草子はその多くが匿名によるものであり作者は不明なものが多い。都の錦は『元禄太平記』において「好色文の達人、西村市郎右衛門筆を振ふて西鶴を消す」という言葉を残しており、この言葉から、西村本の作者を未達本人と見ることも出来るが、しかしその作品内容が多岐にわたることや、複数のペンネームが用いられていることから、それらすべてが未達一人の手によるものとは考え辛く、当然複数の作者が関わっていることが想像される。そこで「一般には範囲を広くとり、彼の関与したであろうと思われる小説群」⁽²⁾に対して西村本という呼称が用いられている。また、西村本には未達以外にも数名の有力な書肆があり、中には刊記に未達自身の名が見えない書も存在するため、中嶋隆氏の述べられるように「西鶴に対抗した京都書肆の一連の小説群として『西村本』をとらえた方が妥当」⁽³⁾であると考えられている。

本稿では、この山岡元隣・元恕親子と西村本の書肆グループの間に、なんらかの交流があったのではないかと、との仮定の元に、周辺の資料をさぐってみたいと思う。『百物語評判』は元来、怪異譚そのものよりも評判に力点が置かれているため、文学的な評価は必ずしも高いとは言えず、また山岡元隣自身もその著作の多さのわりには仮名草子作家として注目されることはなかったように思う。しかし西鶴に対抗し一勢力を築いていた西村書肆陣に対して、元隣親子が何らかの影響力を持っていたとすれば、当然その位置付けもかわってくると言える。また元隣の文学グループのメンバーを特定することは、西村本の作者や『百物語評判』会の筆録者を特定する上での一助となるかと思う。

この両者の直接的なかわりを示す資料としては、唯一『誹家大系図』が挙げられる。西村の中心書肆、市郎右衛門未達は書肆であると同時に貞門の俳諧師でもあったが、『誹家大系図』にはこの未達が元隣の門下であったと記されている。さらにその伝記として

西村氏通称□□名久重京師堀川□□□ノ人ナリ書物商ヲ業トス 家書 関相撲 三卷アリ⁽⁴⁾ (執筆者注 □は欠字)

といった記述が見られる。しかしこの『誹家大系図』はその成立が天保九(一八三二)年と、未達の活躍した時代から約百数十年以上後に書かれたものであること、さらに中嶋氏が、

そこでは(執筆者注…未達の)住所を「堀川」にしているが、これは元禄四年の『俳諧京羽二重』によっても、未達の当時の住所は「三条油小路東へ入」である事は明らかであるから、『誹家大系図』の記述はやや信憑性にとぼしいといえるかもしれない。

と指摘される⁽⁵⁾ような住所の誤りもある。さらにそれ以外にも、同書は元隣の息子元恕を「元隣のいとこ」であると記すなど、その記述がやや信憑性にかけるということが言えるだろう。よってこの一書をもつて、元隣と未達のかかわりを断定する、と言うことはしかねる。また『誹家大系図』では未達を元隣門としているが、そのような徴証はないようである⁽⁶⁾と、指摘されるように、これ以外に元隣と未達の直接的な交流を示す資料もない。

しかし、『百物語評判』と西村本を見比べると、その内容にいくつかの共通点が見られ、相互に影響を与え合っていた跡が窺われる。特に怪異を題材とした西村本『新御伽婢子』(天和三年(一六八三)刊。序には「洛下寓居書」との署名があるが、これが未達を指すものかは不明)と『宗祇諸国物語』(貞享二(一六八五)年刊。序には「洛下旅館」と記すがこちらも作者未詳)の二作品とは、『百物語評判』の性質上、影響関係を指摘できる点が多いように思う。

この二作品は元隣の死後に成立したものであるが、『百物語評判』の刊行には先立って出版されており、元恕が加筆

するにあたって利用することが可能であったと思われる。未達が『誹家大系図』の言う通り元隣門下であったとすれば、これら二書が元恕の手元にあった確立は高くなる。元隣グループと西村書肆陣の交流を証明するにあたって、作品間の影響を指摘することはその証左になるかと思われる。次章ではまず『新御伽婢子』『宗祇諸国物語』の二作品と、『百物語評判』を見比べて、その影響関係を整理してみたい。

一、作品間の相互影響

『百物語評判』の西村本の利用についてはすでに前芝憲一氏によっていくつかの指摘がある。前芝氏は『百物語評判』巻四「叡山中堂油盗人と云ふばけ物付青鷲の事」を取り上げ、この話の挿絵〔図1〕が『新御伽婢子』巻三



図1



図2

の八「野叢火」の挿絵〔図2〕と発想を同じくしているということを指摘されている。さらに『百物語評判』「西の岡の釣瓶をろし并陰火陽火の事」の挿絵〔図3〕を取り上げ、この絵と「野叢火」を比較して「木や逃げる男と火の位置など全体の構図が似かよっており、その怪火についても、本文では『火の丸かせ鞠のごとき物』としか記されていないが、挿絵では顔が描かれており、これは『新御伽婢子』の絵から発想を得たのではないかとされる。さらにこれら『百物語評判』の二話は、内容的にも「野叢火」の叙述と似かよっていることを指摘して、「野叢火」からの二話が成立したのではないかと結論づけておられる⁷⁾。本章ではこのご指摘に付け加える形で、同じ西村本の怪談集『宗祇諸国物語』を題材として取り上げ、同作と『百物語評判』との影響関係を考察してみたい。

『宗祇諸国物語』は、主人公の連歌師飯尾宗祇が、諸国遍歴中に見聞きした話を集めた奇談集である。まずはこの作品と『百物語評判』の挿絵に数点、非常に似通ったものが確認できるので確認しておく。

『百物語評判』巻三「天狗の沙汰付浅間嶽の求聞寺の事」はタイトルとおり、天狗の怪異について触れた段であり、伊勢で修行をしていた僧が、にわかに大風と共に姿を消し、同じ日に忽然と周防の国に現れていたという、いわば天狗による神隠しという内容になっている。これと同じ話柄を扱ったのが『宗祇諸国物語』巻二「登高野五障雲」である。こちらは高野山の女人禁制の土地に足を踏み入れた女性が、にわかに黒雲と共に姿が掻き消え、その後八つ裂にされて和泉の国で発見された、という筋になっている。この怪異は本文中には誰の手によるものとは示されていない



図3

ないが、挿絵には天狗にさらわれる女性の姿が描かれており、こちらにもまた天狗による神隠し譚であると見ていいだろう。これら二話は怪異の展開もさることながら、その挿絵が酷似している。【図4】は『百物語評判』、僧侶が天狗にさらわれる場面を描いたものであるが、天狗は水車文様の衣服に頭襟、結袈裟、脚絆を身に着けた山伏のいでたちをし、鉤爪で僧をつかんでいる。背中には鳥のような羽が生え、その眼下には小さな堂のようなものが見える、という構図になっている。そしてこの挿絵は一目でわかるとおり、構図や天狗のいでたち、その容貌までもがごとく【図5】に挙げた『宗祇諸国物語』の挿絵を模倣していると言える。

なお『宗祇諸国物語』の挿絵は絵師、吉田半兵衛によるものであるが、この半兵衛は元隣の著作『宝蔵』『他が身の上』においても挿絵を担当している。『百物語評判』の挿絵も同じく半兵衛の手によるものであった可能性も十分にあり、とすればこういった類似も、単に挿絵師の手によるものであって作者側はなんの関与もしていない、ということもありえるかと思われる。しかし半兵衛は『伽婢子』や『御伽比丘尼』といった他の作品中でも天狗の挿絵を描いているが、それら



図4

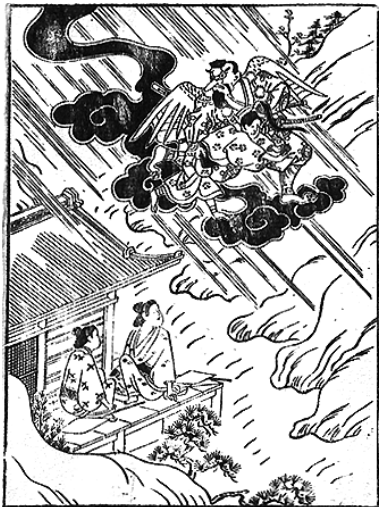


図5

の絵はこの『百物語評判』の天狗とはまったくことなるものであり、こうした構図・図柄の類似が見られるのは『宗祇諸国物語』の天狗だけである。やはりこの挿絵が『宗祇諸国物語』を意識して描かれたものである可能性は高いと思われる。

この天狗以外に挿絵が類似すると思われるのが、『百物語評判』巻四「雪女の事」と、『宗祇諸国物語』巻五の「化女苦隴夜雪」である。『百物語評判』の方の内容は、参会者の一人が尋ねた「雪女は実在するのか」との問いに関して、元隣が陰陽五行を用いて雪女の現れる理を説く、という単純な内容の章段である。一方の『宗祇諸国物語』は、主人公の宗祇が、夜中に庭に出現した大きな雪女を目撃するという内容となっている。〔図6〕（『宗祇諸国物語』〔図7〕（『百物語評判』）に挙げた挿絵はどちらも雪女の姿を描いたものであるが、一目でその容貌や衣服、髪のかかり具合にいたるまで非常に良く似た筆致で描かれていることが見て取れるかと思う。中でも注目すべき特長は、雪女の大きさであり、これら二つの挿絵は、いずれも通常の人間の倍ほどの大きさに雪女を描いている。しかし



図 6



図 7

管見の限り、雪女を大女であるとするような資料は見つからず、そのような共通認識があったとは思われない。『宗祇諸国物語』では、本文中に「せいの高さ一丈もやあらん」という箇所があり、それに忠実に挿絵が描かれたことがわかるが、『百物語評判』においては雪女の容姿について触れた箇所はない。この挿絵の雪女は、『宗祇諸国物語』の挿絵を意識して描かれたものだ、という可能性もあると思われる。

また話の内容という点においても、この「雪女」という話柄は同時期のほかの怪談集には見られない題材であり、さらに『百物語評判』が「雪女」を評した「物おほくつもればかならず其中に生類を生じ侍るなり。」（巻四「雪女の事并雪の説」）という論理も、『宗祇諸国物語』にある「誠雪の精ならば深雪の時こそ出べけれ。」（巻五「化女苦麗夜雪」）というくだりと一致している。もつとも「物が積もれば生類が発生する」というのは『百物語評判』に頻出する論理であるから、必ずしもこの一節が『宗祇諸国物語』に拠った必要はない。しかしこのように『百物語評判』と西村本の怪異小説はその題材や論理にも共通点を含んでいる、という点を指摘しておきたいと思う。

以上、西村本から『百物語評判』へと与えた影響を考察したが、同時に元隣・元恕の側から、西村本へ与えた影響もまたあるのではないかと考えられる。元隣著の仮名草子『小さかつき』という随筆があるが、この巻五第十一「日待の雑談の事」と『宗祇諸国物語』巻二「雷天災」にもまた、共通した怪異認識が見られるのである。この二話はいずれも雷にまつわる怪異を語った章段であるが、そこで語られる陰陽論を用いての雷の分析が、非常によく似かよっている。『小さかつき』は『宗祇諸国物語』より十三年早い寛文十二（一六七二）年に刊行されており、執筆する上で西村側が利用することは可能であったと思われる。以下、両話の該当部分を『小さかつき』『宗祇諸国物語』の順に挙げる。

ある人のいはく。かみなりほどふしぎなる物はなし。おちたるあとを見るに金石ともいはずうちくできとらか

し。いかさまにも生たるもの也と見へて大木柱などをつたひて天にのほれるに。つめがたした、かに待るといへば。ある出家のいはくそのつめがたとおほせらる、ハまことの生類ありてのつめがたにはあらず。雷ハもと天地の間の陰陽のせいのみひた、かへる所也。……(中略)……またかたへよりしろこしにはかみなりのもてるつちを

ひろいたるものもありといひ。かみなりの斧などいへる事も書物にも見へたりなどさま／＼にいひあへる……(後略)。(以下、傍線は全て筆者)『小さかつき』巻五第十一「日待の雑談の事」

雨のをやみもなく雷のひゞきは殊更につよし。速雷鳴風吹烈。席を正して起と孔子は宣し。身を清浄に名香をくゆらせて天意をおそる、物といへと、旅途の急難にて身を清へき水もなければ雨を以て水とし。くゆらすへき薫には尊前の抹香ならてかなし。……(中略)……とかくするほどに雨晴風治り又蒼々たる天となる。石仏に御暇申出て彼松のもとに行見るにふすほりたる木の肌に大きな爪跡あつて。獣類のこの木より上りたると見ゆ。夫雷動は天来の陽の氣の至りと地中の極陰と二の物はた、かふ時鳴動するといふに爪あとの愧をみれば。絵に在るとき鬼形もあるかといぶかし。『宗祇諸国物語』卷二「雷天災」

波線を付した箇所を見比べれば明らかなように、両書はそれぞれに雷の正体を「雷動は天来の陽の氣の至りと地中の極陰と二の物はた、かふ時鳴動するといふ」、「雷ハもと天地の間の陰陽のせいのみひた、かへる所也」と性理学を用いて説明しており、さらに落雷の後にのこる「雷獣」の存在に「いかさまにも生たるもの也と見へて大木柱などをつたひて天にのほれるに。つめがたした、かに待るといへば」(『小さかつき』)、「ふすほりたる木の肌に大きな爪跡あつて。獣類のこの木より上りたると見ゆ」(『宗祇諸国物語』)とそれぞれ触れている。

もつとも、この『宗祇諸国物語』の話は、中山三柳の『醍醐隨筆』の影響を受けているのではないか、との内ヶ崎

有里子氏のご指摘がある⁽⁸⁾。「雷天災」は章段の前半部に落雷による死者が蘇生した話を載せており、それが『醍醐随筆』に載るものと一致すること、さらには性理学を用いた雷の説明が『醍醐随筆』にも見られ、両書に取り上げられる事象がほぼ一致していることを考えれば、『宗祇諸国物語』が『醍醐随筆』にその大枠を拠ったことはご指摘の通りであると思う。しかし同時に、『小さかつき』も参照していた、という可能性はないだろうか。『醍醐随筆』の該当部分は以下のようになっている。

雷は陰陽の搏撃なり。陽気陰につゝまれて出んとする時、まづ火気外にあらはれて電となる。出得ざる時陰中にて震ば地にこたへて鳴、つよく震て出たる時はおつる也。……（中略）……さて雷震の説いにしへより多し。悪人雷にうたるゝと云はさも有べし。陰陽の搏撃は怒気也、悪気也。同気相求、同声相応するゆへに、かならず悪人はうたるべき也。若有疾風迅雷甚雨則必変ず。夜といへども必起て衣服冠して坐すとあるは、天の怒りを敬するいはれ也

これと先に挙げた『宗祇諸国物語』を見比べると、確かに陰陽を用いた雷の説明という点は一致しており、さらに二重傍線で示したように両書とも孔子の故事を引くなど、おおかたの論旨は同じであると言える。しかし一方で、『宗祇諸国物語』には、『小さかつき』のほうにむしろ近い表現も見受けられる。波線部に見える「陽の気が天に、陰の気が地にそれぞれ属する」というのは陰陽二元論の基本的な考えであるが、『小さかつき』『宗祇諸国物語』がどちらもそのことに触れているのに対して、『醍醐随筆』は単に「陰陽」とするのみであって、陰陽をそれぞれ天地に属するものとする表現は見られない。また『宗祇諸国物語』『小さかつき』にあった雷獣の爪あと云々に関する記述（一重傍線部）も『醍醐随筆』には見られない。よって『宗祇諸国物語』が『醍醐随筆』にその大筋を拠りながらも、補

助的な資料として『小さかつき』を参照していた可能性もあるのではないだろうか⁽⁹⁾。

以上、確認してきたように、元隣・元恕親子と西村の作品の間には、相互に影響し合っていたと思われる事象が多くあり、特に元恕が『百物語評判』を編むにあたって西村本の怪談集を用いた可能性は高い。これらの影響関係は、本稿の主旨である元隣親子と西村書肆グループの交流を示唆するものであるかと思う。続いて、書肆西村周辺と元隣親子とのかかわりを、作品から離れて周辺資料から探ってみたい。

二、坂上松春とその周辺

冒頭で述べた通り、未達本人と元隣、元恕との交流を直接示す資料としては『誹家大系図』があるのみであって、他の資料は見つかっていない。では未達以外に元隣親子と書肆西村をつなぐものはないのか、ということ、ここでは坂上松春という人物を取り上げてみたい。

この松春という人物は、次に挙げる『俳諧家図』（宝暦元（一七五一）年刊）⁽¹⁰⁾で確認できる通り、元隣の弟子の坂上好春の子であり、いわば元隣門下であるといってもよい人物である。当然元隣とも親密な交際があったと思われる。

元隣

山岡氏 家書有『身染千句』『誹諧式』『諸国独吟集』『吉野山独案内』『新百人一句』等。没年不詳

好春

坂上氏 号向陽堂。貞享元祿中之点者也。没年不詳（晋風曰、宝永四年八月十一日没）

松春 好春之息。而宝永中之点者也。号池流亭。没年不詳。

そしてこの松春は未達と共著で『俳諧祇園拾遺物語』（元禄四）、『俳諧小傘』（元禄五）という二冊の俳書を出版しており、未達と親密な交際をもった人物であるということがいえる。東明雅氏は未達が元隣の弟子であった可能性を、「未達が最も緊密な関係をもち、著作の援助を行っている坂上松春が、元隣の弟子好春の子である事実などと考えあわせ、その可能性は十分である」⁽¹¹⁾と述べられている。両者の密接なつながりがどこで生じたか、ということを考えれば、当然元隣の元でこの二人が同門であった、ということが有力な選択肢になるかと思われ、冒頭で挙げた『誹家大系図』の記述を裏付けるものであると言える。また元隣らと未達の間に直接の関わりが無かったとしても、元隣門下の松春が未達との間に深い親交を持っていたということは、元隣らと西村書肆グループをつなぐ太いラインとなりえることは間違いないだろう。

またこの松春という人物については中嶋隆氏のご論考がある。中嶋氏は未達と松春共著の二作品、『俳諧祇園拾遺物語』『俳諧小傘』の奥書⁽¹²⁾に書肆として名を連ねる「坂上甚四郎」という人物を取り上げ、この「坂上甚四郎」と坂上松春の住所が、同じ京都の「御池衣棚下ル町」であることから、これら二者が同一人物であるとされる。つまりは元隣門下の松春が書肆として未達と出版活動を行っていたということになる。さらに中嶋氏は、この松春が「西村市郎右衛門と相板元になる事の多かった坂上勝兵衛なる書肆とあるいは何らかの関係があったのかもしれない」⁽¹³⁾と推測を広げられている。

さて、ここに登場した坂上勝兵衛という人物は主に天和年間から元禄までの間書肆として活躍した人物であるが、

管見の限りでは坂上勝兵衛が書肆として出版した本は、ほとんどが西村市郎右衛門未達との相版本ばかりであり、勝兵衛が単独で出版したものは見当たらない。唯一、享保八年に発刊した『其角十七回』という句集のみが西村と組まず、他の本屋との相版として出されているが⁽¹⁴⁾、ただしこれは初代西村市郎右衛門未達の死後のことである。なお、初代以降も、西村市郎右衛門の名は世襲されていき、江戸後期にいたるまで、本屋としての西村は存続し続けるのであるが、勝兵衛はこの二代目以降の市郎右衛門とは手を組むことはなかったようである。こういった点からも勝兵衛と未達の個人的なつながりが濃かったことが窺われる。中嶋氏の言われるように、元隣門下であった坂上松春が、この西村の書肆坂上勝兵衛となんらかのかかわりを持っていたとすれば、当然、元隣親子と西村の間には大きなパイプが存在したということになるだろう。

では、松春と勝兵衛の間にはどのような関わりがあったのか。苗字以外の共通点ということでは、この両者の住居がごくごく近い位置に存在していた、ということが挙げられるかと思う。松春の住所は先に述べた通り、「御池通衣棚下ル」であるが、『京町鑑』【宝暦十二（一七六二）年刊】は「衣棚通」「御池下ル」の示す地名を「長浜町」としている。これは現在の京都市中京区長浜町にあたる。

一方で板元坂上勝兵衛の住所はというと、『宗祇諸国物語』の刊記に見られる

貞享貳次暦乙丑 正月上澣日 神田新革屋町 西村半兵衛

京師三条通 西村市郎右衛門

同八幡町通 坂上勝兵衛

『立花手曳書』刊記に見える

天和四歳 京三条通塩屋町 西村市郎右衛門

孟春良辰日

同三条坊門新町 坂上勝兵衛

江戸新革屋町

西村半兵衛⁽¹⁵⁾

そしてやや時代は下るものの淡々編『其角十七回』の刊記に見られる

享保八季春仲浣日

錦後室大圭書

京御池通新町東江入町 坂上庄兵衛 梓行

田辺作右衛門板⁽¹⁶⁾

の三通りのものが確認できる。しかしこの八幡町通り、三条坊門通、は『京羽二重』、『京雀』といった当時の地誌によれば、いずれも現在の御池通の異称であるらしい。よってこの三つの住所は同じ場所を指したものであるかと思われる。この中で一番詳しい表記である「御池通新町東江入町」は御池通と新町通の交差点を、東に折れた辺り一帯の土地、具体的な町名を挙げれば現在の西横町、神明町、それから松春の住居があった長浜町辺りを指すかと思われる。『都名所車』（正徳七（一七一四）年）では松春のすむ長浜町を二町ほど下った「衣の棚」町の異名として「三条通新町ひがしへ入所」を挙げており、この「新町東入」という表記が衣棚通周辺を指していることは間違いないようだ。つまり松春とこの勝兵衛の二者は、御池通と衣棚通りの交わる周辺の、ごくごく近い位置、場合によっては同じ町内に住んでいたということが言えるかと思う。

こうした住所の近さに、両者ともが西村の書肆であることを考え合わせれば、注⁽¹³⁾で中嶋氏が指摘されるとおり、当然この二人の間に親交があったと思われるし、さらに「坂上」という名字の一致を考えれば、親戚同士であった可能性も高いと思われる。松春が書肆として出版した書物は、前述の未達との共著二冊しか現時点で確認されておら

ず、書肆を本業としていたのかどうかは疑わしいところである。その松春が本を出版したことの裏には、この勝兵衛の協力があったと見るのが自然ではないかと思われる。

さらに、「坂上勝兵衛」なる人物は、右にあげた『宗祇諸国物語』の刊記に確認できる通り、同書の板元の一人であった。また『新御伽婢子』の刊記

天和三歳 亥九月上旬 江戸神田新革屋町 西村半兵衛

京三条通 同 市郎右衛門

八幡町通 大津屋庄兵衛

に名を連ねる大津屋庄兵衛も、住所の一致からおそらくこの坂上勝兵衛と同一人物ではないかと見られている⁽¹⁷⁾。すなわち『百物語評判』に影響を与えたと思われる二書の両方が、この坂上勝兵衛なる人物に関わるものであった、ということである。このような点を見ても、やはり元恕が手にした西村本の怪談集はこうした西村グループとの直接的な知縁をもつてもたらされた可能性が高いといえるだろう。

おわりに

『百物語評判』と西村本の怪談集はその内容に多くの共通点を含むこと、さらに作品外にも、元隣・元恕親子と未達グループが交渉を持っていた跡が窺える、ということをも以上確認してきた。その接点には当然ながら俳諧の存在が挙げられ、未達及びその他の西村本書肆達が、元隣・元恕の文学グループに属していたことが想像できる。

『百物語評判』本文中には、元隣が参会者を「何れもさしもの学者たちなれば」（巻二の四「箱根の地獄并富士の山の三尊来迎の事」と評する場面や、あるいは自作の狂歌を披露する場面（巻三の六「山姥の事付一休物語并狂歌の事」）が見られ、参加者がみな文学的素養のある人物であったことが窺われる。ここに収録された『百物語評判』会のみならず、同様の集まりは他にも持たれていたことが想像でき、その席に西村側の誰かが出席していた可能性も低くはないだろう。そうであるとするならば、元隣・元恕らとの交流が西村側に文学的な影響を与えたことは想像に難くない。例えば『新御伽婢子』には、各話末に筆者による「評」が付け加えられているが、このような形式は『百物語評判』会と同じ趣向であると言える。逆に西村本が『百物語評判』に利用されていたことは、本論中で考察した通りである。

冒頭述べたように、西村本は大坂の西鶴に對抗して京都の出版を盛り立てた一代勢力であった。その活躍の裏には、元隣親子と西村本書肆らを中心とした文学グループが存在していたこと、さらに寛文から元禄にかけて、上方の文化を活性化させる上で大きな役割を担っていたのではないか、ということをも本稿の結論としたい。

註

- (1) 「西村本の浮世草子」（『研究資料日本古典文学 第四巻近世小説』明治書院 一九八三・一〇）（篠原進担当）
- (2) (1)に同じ
- (3) 中嶋隆「西村市郎右衛門未達の出版活動と没年の推定」（『初期浮世草子の展開』若草書房 一九九六・五）
- (4) 『日本俳書大系一五 俳諧系譜逸話集』（日本俳書大系刊行会 一九二七・五）に拠る。
- (5) (3)に同じ。
- (6) (3)に同じ。
- (7) 前芝憲一「『百物語評判』の成立」（『仮名草子——混沌の視覚』和泉書院 一九九五・二）
- (8) 内ヶ崎有里子「『宗祇諸国物語』巻二「雷天災」について——『醍醐隨筆』との関連——」（『新しい国語教育の基層』（長尾高

明先生華甲記念論集刊行会編 一九九六・八)

- (9) 『小さかつき』のこの章段は、後にほぼ焼き直しの形で『百物語評判』に収録されている(巻一の七)。ここでは、元隣はこの論理を『性理大全』からの引用だとしており、事実『性理大全』巻二十七の「雷」に見える朱子・程子の説とその論旨は一致している。

- (10) 『日本俳書大系一五 俳諧系諸逸話集』所収(日本俳書大系刊行会 一九二七・五)

- (11) 東明雅「西村未達(市郎右衛門)の研究」(『可里婆欄』信州大学文学研究会 一九七二・二)

- (12) 『俳諧初学祇園拾遺物語』(元禄四年刊)

江戸 神田新革屋町 西村半兵衛

京三条通油小路東へ入町 西村市郎右衛門

坂上甚四郎

『俳書叢刊 第七卷』(天理図書館綿屋文庫編 臨川書房 一九八八・五)に拠る

『俳諧小傘』(元禄五年刊) 奥書

江戸 神田新革屋町 西村半兵衛

京三条通油小路東へ入町 西村市郎右衛門

同衣棚御池下ル町 坂上甚四郎

『近世文学資料類従 参考文獻編二三』(近世文学書誌研究会編 勉誠社 一九七九・四)に拠る

- (13) 中嶋隆「西村未達と松春・高政」(大阪俳文学研究会・会報 一九八六・二)

- (14) 『其角十七回』の刊記には「京御池通新町東江入町 坂上庄兵衛」(傍点執筆者)と名が記されており、名前の表記が一字違っている。しかし後述する住所の一致から「勝兵衛」とこの「庄兵衛」は同一人物であると考ええる。もつとも刊行時期が勝兵衛の活躍した時代から大きくずれることから、この「庄兵衛」が勝兵衛の後継者であった可能性もあるかと思うが、今回は調査が至らなかった。

(15) (3)に拠る

- (16) 『古典俳文学大系 享保俳諧集』(集英社 一九七二・一〇)に拠る。

『百物語評判』と西村本

- (17) 野田寿雄「西村本の浮世草子」『近世小説史論考』（塙書房、一九六二）のご指摘による。

使用テキスト

- 『百物語評判』『江戸叢書文庫 続百物語怪談集成』（太刀川清校訂 国書刊行会）
『小さかつき』『古典文庫第二二一冊 小さかつき』（朝倉治彦校 一九六五・二）
『宗祇諸国物語』『俳諧叢書 第六編 俳人逸話紀行集』（佐々醒雪 巖谷小波校訂 博文館 一九一五・八）
『新御伽婢子』『古典文庫第四四一冊 新御伽婢子』（湯沢賢之助編 一九八三・六）

本稿は二〇〇七年度第四十四回日本文藝学会大会（於四国学院大学）での口頭発表に基づくものである。当日ご指導いただいた先生方に感謝申し上げます。